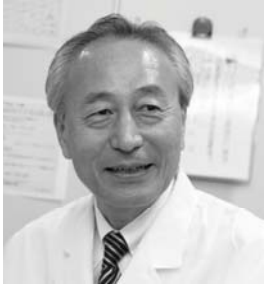

序　文

京都医療センターのアニュアルレポート平成27年度版をお届けいたします。中村孝志院長が、平成23年4月～28年3月の5年間にわたり、京都医療センターの充実と発展に全情熱を注がれてきましたが、このレポートはその集大成といえるものです。

この5年間を振り返りますと、中村孝志院長の主導により、手術支援ロボット（ダヴィンチ）が導入され、さらにPET/CT検査が可能な新外来棟が竣工いたしました。また最新アンギオ装置が入りハート治療センターも立ち上がりました。また、最新リニアック装置導入を含む新規放射線治療棟が計画され、28年度中の建設開始が決定されています。このように、本院は時代のニーズに基づいて新規事業を開始し、また、すべての診療科・部、臨床研究センター、そして附属看護助産学校が全力をあげて、診療・教育・研究に取り組んできたことにより、地域中核病院としての役割を果たしてまいりました。本院の発展に大きく貢献されました中村孝志院長に対して、深甚なる謝意を捧げたいと存じます。

さて、医療をめぐる国内外の状況はきわめて厳しいものがあり、病院の経営はその規模の大小にかかわらず、非常に困難なものとなっています。政府は医療費を抑制するために「地域包括ケア」を促進し、患者を、病院から地域、地域から家庭へ移すという基本方針を固め、急性期医療を行う病院の重症度や看護定数の規準をますます厳しいものに設定してきています。診療報酬改定も毎年のように更新されます。このような中で、京都医療センターは地域のみなさまからの信頼と期待にしっかりと応えるために、さらに精進しなければなりません。それには、この地域の医療状況と地域のみなさまのニーズをしっかりと把握しながら、「真の総合病院」としての役割を明確に打ち出すことが肝要です。

京都医療センターは、明治41年の設立以来、京都南部における最も重要な基幹病院として発展してまいりました。わが国の少子高齢化問題とも関連して、国民のヘルスケアは、がん、脳血管障害、メタボリックシンドローム、女性、こどもを対象として、これらに対する救急医療、高度先進医療、ゲノム個別化、QOL向上、発症予防が求められています。当院は、臨床研究センターによる地域の大規模コホート研究の成果を生かし、この地域の医療ニーズを明確にし、単に高度急性期のみに傾くのではなく、柔軟で多様かつ高度の、一人ひとりに親切で細やかな医療を提供する、世界で有数の「真の総合病院」を目指します。

今後も、みなさまのご支援とご鞭撻をよろしくお願いいたします。

院長　小西　郁生